

隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第7回

森の彫刻家 上床利秋

我々はどこから来たのか？

我々は何者か？ 我々はどこへ行くのか？

このフレーズはゴーギャンの同名の油彩作品で有名になった。その出典はキリスト教の教理問答からの引用という。

「このフレーズはゴーギャンの同名の油彩作品で有名になった。その出典はキリスト教の教理問答からの引用という。」

「現在を生かされている我々の祖先は何者だったのだろうか。それを知るためにモシターンは霧島伝説まで遡る。」

「そして中央勢力に対する三回の抵抗に着目している。はじめは、隼人族の叛乱、そして秀吉の九州征伐の時を。最後は西郷どん率いる西南戦争を。」

「私たちの風土はそういう歴史舞台上に度々さらされた。きっと幾千万の議論がなされ、血も流れたことだろう。TAKENORIのモシターンに流れている問いかけは、私には古代隼人族思

想を考えることで霧島の現在を見つめ、将来どう繋いでいくべきかを模索しているように思われる。」

数年前に霧島市シビックセンターで、私が個展を開いた時、また向花人形についての江戸時代の国分を追いかけた時、その思いはこの情報誌や地元ケーブルテレビが深く伝えてくれた。隼人族の思想は現代に生きていたい。

黎明期における日本の洋画は、黒田清輝を筆頭とする薩摩の絵描きたちが築いてきた。その熱き表現する心は今でも引き継がれており、高校生美術展においてもその気風を感じるといっている。黎明期における日本の洋画は、黒田清輝を筆頭とする薩摩の絵描きたちが築いてきた。その熱き表現する心は今でも引き継がれており、高校生美術展においてもその気風を感じるといっている。黎明期における日本の洋画は、黒田清輝を筆頭とする薩摩の絵描きたちが築いてきた。その熱き表現する心は今でも引き継がれており、高校生美術展においてもその気風を感じるといっている。



「青雲に貫く」南日本美術展 JAL賞

著者作 一九九八年 黒御影石 鹿児島赤十字病院蔵

「健康に生きることの良さ」「あきらめない、努力することの良さ」を病める患者さんにも鑑賞させてあげたいと、松田剛正院長はこの作品を自費購入。それを鹿児島赤十字病院に退職記念として寄贈された。ドクターと私とは、元から縁があった訳でなく、展示会のギャラリートークでたまたま知り合って名刺を交換しただけの間柄だった。



「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」

ポール・ゴーギャン作 1897~98年 油彩 ポストン美術館蔵
ゴーギャンはキリスト教と決別して南海の楽園タヒチに行ったわけだが、このタイトルを作品名にしているという事実は興味深い。

土や彫刻刀に持ち替えて自分探しの旅を続けている私だが、これからはただ道を探すのでなく、後進にその良さを今まで以上に紙面で語ることも私に与えられた宿命なのかもしれない。かつて私はトルソーと呼ばれる男性人体にこだわった。最近それを基にして、「ほっけもん」の心意気を見出すべく制作を切り拓いていけるのではなからうかとも考えている。

私は、ポップ ティランの影響を持つ吉田拓郎の歌「今日までそしてあしたから」に彼らしさを思い、曲を聴くことがある。

「私は今日まで生きてみました。」
のフレーズの生きてみたという部分に拓郎の生きざまを共感するからだ。
今日も隼人族の森を渡る風がアトリエを吹き抜けていく。